

# 芳村俊一の本

没後10周年

2016年5月18日

陶 研 究 会

## 芳村俊一の本

### 芳村先生が書かれた主な7冊の本

<u>本</u>	<u>名</u>	<u>発行年</u>	<u>発行元</u>	<u>頁</u>
1.	土と石から見たやきもの	1980年	(株) 光芸出版	1
2.	釉から見たやきもの	1982年	(株) 光芸出版	1
3.	陶土の探求	1988年	(株) 光芸出版	4
4.	やきものをつくる	ダレでもできる自主陶芸		
		1997年	(株) 双葉社	5
5.	やきもの実験 静岡の土	1997年	静岡新聞	6
6.	身近な土を焼く	2001年	(株) 双葉社	6
7.	作陶考	2001年	私家本	7

\* 「作陶考」は書店では購入できません。  
前に書かれた6冊の総括版ともとれる  
もので、この本が絶筆となりました。

# 目次の一覧表

## 1. 土と石から見たやきもの

### 第1章 土からという発想

幼稚なひとり歩き、焼いたらどうなるか、軸から胎へ、  
「土」からの発想、「土から」とは手と足から

### 第2章 土から見たやぎもの一陶器の窯一

「陶土」の定義、土の母岩、東アジアの同類花崗岩、  
過去の湖その1（第3紀の湖）、過去の湖その2（第4紀の湖）、  
主な陶器窯場の陶磁地質的組み立て

渥美古窯群、瀬戸、美濃、織部、常滑、信楽、伊賀、島ヶ原、  
丹波、越前、備前、唐津、薩摩、萩、上野・高取、小石原、小鹿田、  
笠間・益子、石見

### 第3章 石から見たやきもの一磁器の窯一

陶石による機器、陶石、  
陶石と磁器窯

有田、大河内、平戸、九谷、姫谷、出石、砥部、洪草

### 第4章 土や石から新しいものを模索して—いくつかの実験—

土に対する考え、東洋陶工の焼成思想、超苦鉄質やきもの、凝灰岩と  
海成泥岩、ロームとシラス、部分変色、風変わりな土、釉

## 2. 釉から見たやきもの

### 第1章 釉とは

#### ○釉という言葉

釉の定義、

釉の定義から外れる釉くカネヨクレンザー、三俣石、釉が吹き出す>  
なにが釉か？<釉と呼べるものは多いけれど>

釉の名称<釉の名称はなるべく原料でつけたい、釉の名前を二重式に  
してはどうか>

#### ○釉の起源

オリエントの土と東洋の土、

窯の能力と融かし得るもの<窯能力が高い融けるものが多くなる>  
エジプトの釉<人類最初のエジプトの釉とは>

エジプトの砂<アルカリ>

イラクの釉くバビロンの釉文書、鉛の登場、調合>

股の釉

### ○胎と釉

土が変わると釉も変わる、現代の釉は堆積性のカオリン系粘土を  
対象とする

釉の胎に対する物理性<施釉すると分解する土、保護強化な  
顕著の例>

同じ釉をちがう土にかけてみる<透明楽焼釉—約 900°C—、  
透明高温楽焼釉—約 1080°C—、長石—石灰—粘土釉、  
土灰釉・銅呈色釉・鉄呈色釉>

### ○釉と焼成

一度焼かれたものを再度焼き焼成を変えてみる<三州赤瓦、群馬県  
月夜野町洞須恵器窯の陶片、青森県市浦村十三湊の青磁陶片>

古陶片再焼、窯内能力と釉、

燃料の問題<燃料と空気、燃料の質と釉との関係>

## 第2章 釉の生理

### ○桜島昭和溶岩

昭和溶岩をそのまま焼く、水上武先生に聞く、昭和溶岩を釉にする、  
塩酸で洗ってみる、昭和溶岩にいろいろ加えて<珪石、藁灰、笹灰等、  
長石、木灰等>

桜島の他の石と溶岩焼の利用<宮崎県脇元窯と溶岩焼>

### ○融ける

いろいろな石を焼いてみる、

融け方<金属融け、土石融け、融点>

混ぜると融けやすくなるか？<信楽土+石灰、籾殻灰と雑木灰>

先輩陶工の混合への観念

### ○流れる

どう流れるか？<主な石の粘度、灰の粘度>

流れ落ちへの対応<流れさせる、流れさせて止める、流れさせない  
ために>

### ○色の現れ

見かけの色と焼いた色<凝集と拡散>、

呈色物質の含有量、

コバルト談義<青の魔力、コバルトの呈色力、牛の食べる物には  
コバルトがある、コバルトの入った土>

あおく見えるもの<青磁の呼称、水と微量の鉄を含んだガラス>

### 第3章 灰（アルカリ）と名のつくもの

#### ○ニネベ土板のカラティ

#### ○灰の種類

原料による分類<植物灰、動物灰、石灰、その他>

単味の焼成温度で灰を分ける

#### ○灰の特質

焼くだけで微粒子になる、媒融作用、

ブルトナー作用<融かす働き、分散させる働き、流動させてガラ

ス面を平にする働き、気泡をつくる、茶～褐色を青～緑に変える

働き>

#### ○融かす仕事と灰の利用

木炭の利用、石灰の利用

#### ○主な灰—各論—

テスト方法、松灰、

混合木炭—土灰<混合の意味、混合灰の名前、混合灰の実例>

イス灰

高珪酸質の灰<珪酸による白釉、白と青・緑などの組み合わせ、

笹も藁お代用、灰の単味焼成雑記ノート>

### 第4章 白と透明

#### ○長石など白い釉石の生成とその使用略史

マグマ、

珪長質のマグマ→流紋岩変質物<生瀬石>

マグマの分化侵入→アプライト<釜戸長石>

マグマの純化結晶→ペグマタイト<広見いし>

#### ○古窯を歩いて

古窯の石、目立って多いアプライト、ペグマタイト長石の散らばる

古窯、流紋岩の変質物が見られる古窯

#### ○長石いろいろ

ソーダ長石、福島長石、東北西半系の長石代用石

#### ○瀬戸の釉石

瀬戸の釉<瀬戸の釉は難しくはない、瀬戸の自然、小長曾の窯跡で>

#### ○その他

流紋岩のもの—生瀬石に相当、アプライト系

### 第5章 青磁考

#### ○青磁いろいろ

単味で青磁風になるもの<低温で青磁になるもの>

文献に見える青磁釉、三田青磁、その他いくつかのテスト、青磁考

## 第6章 鉄と苦土による呈色

○含鉄苦土の土石単味は焼き物物理で灰に似る<灰に似た融け方、

灰はプラスで安定を図り、含鉄苦土はマイナスで安定を図る>

○ローム釉

来待石、芦沼石、箱根の赤土、その他のローム釉

○その他の含鉄苦土釉

長野県臼田町入沢焼の黒釉、薩摩焼そば釉の場合、石は焼くとよく

似ている、斑レイ岩質

○天目

黒の評価、瀬戸は天目志向から、純黒への志向ー瀬戸黒、鉄の性質

○そば

純黄の浮遊、含苦土の土石を低温で焼く

## 3. 陶土の探求

### 第1章 土とは

#### I. 土の内容

A 土という言葉

B 粘土

#### II. 粘土の性質

A 粘土鉱物

B 実際の粘土

C 粘土の可塑性

D 粘土の焼結性

#### III. 土の調べ方

A 味、匂い、手ざわり

B 石の簡単な焼成テスト

C 土のピーステスト

D ピーステストの焼成結果

E 縄文土器の陶片再焼・所感

### 第2章 土の現場

#### I. 露頭にて

A 1枚皮をむいてみよう

B 現場は変わる

C 土の色

D きめの粗さ、細かさ

E 粘土化過程がよくわかる現場

F 土の割れ方

G 石炭層の見える露頭

H 赤い水

I 白いガス

J 過去の白いガス

#### II. やきものから見た風景論

A やきものの丘

B 粘土の山

C 岬々たる屹立

### 第3章 日本の土と陶

#### I。大地の時間的変化と横へのつながり

- A 幻の日本列島
- B 環境の変遷
- C 横へのつながり

#### II。窯の立地

- A 窯の足元の石を見て
- B 花崗岩、流紋岩等の陶業
- C 安山岩の陶業
- D 輝緑岩を基盤にした窯場
- E 蛇紋岩の陶業
- F 砂岩の陶業
- G 砂岩陶業と民芸
- H 凝灰岩の陶業

#### III。陸水への堆積

- A 過去の水溜まり
- B 堆積物は攪乱される

#### IV。日本の陶法

- A 土と釉
- B 古瀬戸内陶法
- C 日本海陶法
- D 楽焼陶法
- E 陶法考察

### 第4章 土の取り扱い

#### I。さらし

#### II。土の精製

- A 精製への方針
- B 水簸と水篩い
- C 叩き
- D 揉む
- E 土混ぜ

むすび。 触覚文化としての陶

## 4. やきものをつくる ダレでもできる自主陶芸

### 第1章 自主陶芸とは何か

- どんなものでも先ず焼いてみる  地球に学ぶ
- 日本の土とは、日本の焼きとは  地球の色、やきものの色
- ダレでもできる自主陶芸

### 第2章 窯づくりから始めよう

- なぜはじめに窯づくりか  窯づくりの材料は？
- 実際の窯づくりに必要なこと
- 実践編：陶芸グループ「へんど」ユニーク窯紹介

### 第3章 自分の土を探す

- 釉になる条件  水との関係が土の性格を決める
- 土にはさまざまな成分が含まれている
- 土は焼いてみないとわからない

- 実践編：実際の土探しと処置、テストピースおづくり方
- 第4章 釉にならないものはない
  - 釉に対する発想転換
  - 釉にするための作業条件
  - デタラメ釉がデタラメでない理由
  - 実践編：石、土、雑品を釉にする
- 第5章 成形・焼成について
  - 釉はどのように熔けるか
  - 土石釉略説
  - 自然を主としたやきものの“美”
  - やきものは焼きで決まり、焼きは窯で決まる
  - 窯焚きアラカルト
  - 実践編：ロクロで挽く、紐づくり、たたらづくり

## 5. やきもの実験 静岡の土

- 第1章 川の恵み
- 第2章 海底からののしあがり
- 第3章 海の悩み、海の恵み
- 第4章 火山の恵み
- 第5章 熱い水がつくった土
- 第6章 山間部の土
- 土の採集と処理

## 6. 身近な土を焼く

- 第1章 土採りに出かけよう
- 第2章 土づくりの方法
- 第3章 日本の土を焼く
  - A 湖沼に堆積した土
  - B 海に堆積した土
  - C 火山灰が起源の土
  - D 熱水作用でできた土
  - E 地底の岩が風化した土
- 第4章 やきものをつくる
  - I。胎にする
    - 胎に関する工程
  - II。釉、化粧掛けにする
    - 釉・化粧掛けに関する工程
  - III。焼き戻す



## 7. 作陶考 「陶・作陶への思索と模索」

### [1] . 50年間のものやき人生

陶への開眼」と発想への道程

- (0) 惚れ込みのはなし
- (1) 遠い遠いヨチヨチのころ
- (2) 石を焼く
  - a. 最初の教師・・・浅間溶岩、自然なままの美しさを発見
  - b. 石イコール釉 石則是釉
  - c. どんな石がよかったか？
  - d. 第2の教師・・・大谷石 石の可塑性を教えられる  
堆積岩と動力変成岩の一部には可塑性がある
  - e. 石をそのまま彫刻して焼く

### [2] . 子供に教えられて人工品もろもろを焼く

- a. 水彩絵具
- b. カネヨ・クレンザー（ただし、30年前のもの）、（胎と釉との境界）  
宋代、景德鎮の1120℃焼成の磁器
- c. コンクリート・ブロックを焼き、今までボンヤリとわかっていた  
“ものと熱との対応”をはっきり把握できた
- d. 身近なものを片っ端から焼いてみる

### [3] . 日本各地の土を焼く6万種

その土がやきものになる「焼き」を探して焼いてみる

- a. テスト方法
- b. 土やき一例  
旧我が家の庭土・・・東京都練馬区田柄町・・・昔は大根畑

各地の古いやきものかけらを大体同じ条件で焼き直してみる

- a. 再焼してもほとんど変わらないもの
- b. 陶胎は不変、または少し収縮し表面が変化する
- c. 再焼により陶胎が発泡したり膨張したりするもの
- d. 再焼すると完全に溶けてうわぐすり状になるもの
- e. 施釉古陶片を再焼して釉の変化をみる
- f. 古陶片再焼から学んだこと

## 1992年の自己革命

どんな土でも美しい絵具を持つことの発見

a. 今まで高温だけで焼いていた土をヒョンなことで低温窯に入れた

- 窯彩
- 自然釉への前ぶれだった低温焼き

自然彩への有力な技法—焼き戻し

- ちょっぴり理論を
- 焼き戻しの実技

考えさせられること

やきものの魅力

- 風評・評判
- 私がやってきた作陶の方針
- 千5百年お世話になった中国陶法から乳離れしよう

やきもの以前

地球

高速回転移動体

超大陶芸家—地球

地球は先ず窯をつくった。 その温度は？

火山窯と溶岩

水上武先生—たった1時間しかお話しできなかったが私の生涯、たった

1人の師

人は、分化は緯度線に沿って西から東が大勢

ヒトはどう進化して、いつ、どこで、ヒトになり、わが日本へはどうし

て

きたか？

動きを誘うもの、動きやすいところ

ヒトはどう動いたか？ そして日本人は？

人類最初の外海渡航者—アボリジニ

行き動く人間

文化、特にやきもの

人間の内面の発展 主体の芽生え

主体の技術 では主体とは？ 化学へ やきものへ